

(続紙 1)

京都大学	博士（地域研究）	氏名	シランカ 実希
論文題目	アフリカにおける障害者への介助実践 ーケニア共和国サンプル県の支援施設を事例としてー		
（論文内容の要旨） 近年、障害者支援のアプローチにおいては、地域社会における障害者のエンパワメントを目的とする「地域に根ざしたリハビリテーション (Community-Based Rehabilitation: CBR)」の概念が国際的に推進され、脱施設化の動きが広がっている一方で、サハラ以南アフリカにおいては施設に依拠した支援が主要な手段として位置づけられている。本論文では、ケニア中北部に位置するサンプル・カウンティの障害者支援施設（以下、S施設）を対象に、介助がどのようにおこなわれ、入所者の日常生活に影響があるのか、その現状を検討することで施設型支援の実態を明らかにしている。 第1章では、本論文で取り上げる調査地の概要を記した。ケニアと、調査地として選定したS施設が所在するサンプル・カウンティの地勢や人口、言語、障害者の支援政策について概観した。 第2章では、本論文で調査対象とした障害者支援施設の概要を説明し、施設内で実施されている支援を明らかにした。具体的には、施設の間取りを理解するために、事務所や教室、寮部屋、トイレ、グラウンドなどの空間を紹介した。また、S施設で勤務する職員と入所者の属性を示し、施設内での生活の様子を詳細に記述することで、施設内の支援体制を説明した。 第3章では、参与観察のデータから食事介助の回数を算出した。(1)職員だけでなく、入所者も脳性麻痺で重度の障害のある入所者にたいして食事介助をおこなっていること、(2)食事介助をする入所者には、特定の相手に集中し介助する者がいたこと、(3)食事介助をする相手を選ぶことなく食事介助をする入所者がいること、そして(4)職員に指示されることで、普段は食事介助をおこなわない入所者が食事介助に取り組むことがあるという4点が明らかとなった。 第4章では、排泄介助について職員による自発的な介助の工夫として、排泄用具を製作して改善に取り組んだ事例を取り上げた。これは、職員による日頃の脳性麻痺のある入所者に対する介助経験の苦労からうまれた創意工夫であり、介助する職員と介助を受ける入所者という両者の協働関係によって生まれた自発的な実践であることを示した。 第5章では、入所者による手伝いに焦点を当て、特に「身支度」と「登下校の付き添い」の実態を検討した。職員だけでなく、入所者が施設内での支援活動に従事することで、関わりの少なかった入所者どうしが関係性をもつことが可能となっている。入			

所者による朝の身支度の手伝いに対し、職員はその行為をあえて制止せず、危険な状況が生じる可能性がある場合には、事前に声かけや見守る姿勢をとっている。そして、入所者が他の入所者の歩行補助具を修理した事例からは、S施設においては、入所者が他者を頼り、支援を求めながらも、同時に、支援側にまわる実践こそが、S施設における日常生活を支える重要な要因となっていることを明らかにした。

第6章では、入所者の大半の民族がサンプルであることをふまえ、施設内での生活とサンプル社会の規範との関係について検討した。サンプルの人々は牧畜を主な生業とし、ビーズを多用した装身具による身体装飾を身に着けている。S施設の入所者の中にも装飾を身に着けている者がおり、通過儀礼への参加や社会規範の遵守をする者もみられた。S施設では、こうした文化的実践に対しては個人の意思に委ねられており、その実践は妨げられていない。S施設における日常生活では、個人の選択の自由が尊重されている。

終章では、S施設における介助の実践について総括し、次の3点について考察した。第一に、支援施設において入所者が「支援の受け手」という従来の枠を超え、支援の担い手として重要な役割を果たしており、入所者どうしの介助実践や手伝いが介助の継続を可能にしている点である。第二に、職員と入所者が工夫を凝らしながら日々の支援を実現しており、厳しい状況であったとしても「なんとかやっていく」という前向きな実践が見られる点である。第三に、支援施設は地域コミュニティとして機能しており、必ずしも社会から隔離されていない点である。以上の考察から、S施設は単なる施設型支援の枠にとどまらず、入所者どうしや職員、地域コミュニティとの関係性のなかで、独自の支援体系を構築していることが明らかとなった。